

地域特産種増殖技術開発事業 (抄 録)

吉尾二郎

イタヤガイは山陰地方に多く分布し、時として大発生を見せる二枚貝であり、民謡にまで歌われた地域特産種である。島根県における本種の漁業は、天然での大発生時の採貝、天然稚貝を採集しての養殖に分けられる。前者は数十年周期の天の恵に依存するものであり、安定した漁業とはなりにくい。一方、後者は特産品の安定供給上、有効な漁業と考えられる。

本県のイタヤガイ養殖は昭和54年に企業化され、昭和59年には約300万個の生産を見るに至った。ところが、近年になって種苗となる天然稚貝が減少し、養殖漁業の前途に陰りが見えはじめた。本事業は、この現状に対応し、本種の人工採苗技術を開発するものである。

詳細については「昭和63年度 地域特産種増殖技術開発事業報告書(二枚貝グループ)」を参照されたい。

結 果 の 概 要

1. 種苗生産技術開発

(1) 母貝育成

計4カ所で養殖1年貝からの母貝育成を実施しているが、育成期間中の生残・環境条件等については資料整理中である。

(2) 母貝成熟

浦郷産母貝は4月時点で成熟個体が35~40%を占めた。同時に調査した野波産母貝では、成熟した個体は認められなかった。その後しばらく、全地区とも生殖巣の発達は見られず、11月になると一斉に成熟し、採卵可能な状態になった。

(3) 採 卵

春期4回、秋冬期6回の採卵を行った。産卵誘発は紫外線照射海水の昇温が有効であった。反応のあった母貝は、時間をかければ必ず放卵することが確認され、採卵は母貝を見る目を養えば、特に問題は無いと考えられた。

(4) 幼生飼育

浮遊幼生期の餌料として、クロレラとパブロボの混合が効果的で、クロレラとパブロボの比率を

変えた試験では、いずれの区とも高い生残率が得られた。幼生の飼育密度は5個体/mlまで十分可能であった。キートセラスの餌料効果再試験では、春期と逆の結果が得られ、キートセラスの有効性も確認された。

(5) 他の飼育例

他の飼育例では、付着直前まで高率に生残し、その後全滅するケースが見られた。原因については、酸欠、水質悪化、原生動物等が考えられた。

(6) 付着試験

付着は換水の有無、通気の強弱、餌の多少にかかわらず良く、コレクターの部位別では、通気の強い区で水中のコレクターにも比較的良く付着する傾向が見られたが、全般に水面での付着が良く、およそ2/3は水面で付着した。

(7) 中間育成技術開発

春期に500ℓ水槽と2,000ℓコンクリート水槽での飼育によって得られた11,000個の3mm稚貝を沖出ししたが、25mmサイズまでの生残率は20%であった。秋冬期飼育分の沖出し結果は、今回の資料として整理出来なかった。